2022年11月20日（日）主日朝礼拝説教

『涙と共に種を蒔く人』　井上隆晶牧師
詩編126篇1～6節、マルコ福音書4章1～9節

❶【たとえを用いる意味】

今日は収穫感謝祭です。そこで種蒔きの譬えからお話をしましょう。これは単なる種蒔きについて語っているのではなく、神の言葉を種にたとえて、宣教を語っているのです。ルカ福音書には「**イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。**」（ルカ 3：23）と書かれています。そして三年半だけ宣教を行い、33歳の時に十字架にかかって亡くなりました。この33年の生涯の内、そのほとんどは田舎のガリラヤで大工をして過ごし、何一つ語られませんでした。しかも口を開いて話す時は「たとえ話」だったといいます。「**イエスはこれらのことをたとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。**」（マタイ 13：34）と書かれています。なぜ、たとえ話しかしなかったのでしょう。その理由は、群衆が「**見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである**」（マタイ 13：13）と書かれています。それは弟子たちも同じでした。弟子に「**このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか**」（マルコ 4：13）と言われ、死ぬ前にはこう言われました。「**言っておきたいことは、まだたくさんあるが、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。**」（ヨハネ 16：12～13）人間は神の言葉を聞いても分からず、理解できないのです。

どうも、イエス様はあまり説教というものに期待していなかったようです。人々をお話で感動させ、納得させ、改心させるというようなことはしなかったのです。イエス様は立派なお話ではなく、ご自分の業で救おうとされたのだと思います。

カトリックの神父さんたちと一緒に礼拝することが多いのですが気が付いたことがあります。彼らのほとんどが説教をする時に原稿を書かず、その場で神様から与えられた言葉を語っているということです。もっと肩の力を抜いて楽に話してもいいのではないかと思います。

❷【種蒔きのたとえ】

このたとえは、神の言葉を聞く私たちの４つの心の状態を教えています。「**種を蒔く人**」は神キリストです。「**種**」は神の言葉。大地は私たちです。道端の心の人とは、何度も踏み固めたような頑なな心を持っているので、悪魔である鳥が来て神の言葉を奪ってしまうのです。石だらけで土の少ない心の人とは、心の中にいろいろな石があるので、すぐに神の言葉を受け入れるのですが、根が張れずに、試練が来ると信仰をやめてしまう人のことです。茨の生えている心の人とは、神の言葉も受け入れるのですが、この世の思い煩いや誘惑という雑草の方が多く心に

茂っているので、神の言葉が成長しない人のことです。結婚も大事、仕事も大事、あれもやりたい、これもやりたいという想いが強い人の事でしょう。最後の良い土地の心の人とは、素直な心で神の言葉を受け入れ、実践する人のことです。ここでは四種類の人がいるということではなく、むしろひとりの人の四つの心の状態であると読むことができるでしょう。ある時は道端、ある時は石地、ある時は茨の中、ある時は良い土地なのです。もともと私たちは「**極めて良い**」（創世記１：31）ものとして創造されましたから、から良い土地を皆もっているのです。でも罪が邪魔して、神の言葉を受け入れないようにしているのです。

❸【イエス様の忍耐力のすごさ＝人間を信じているから】

パレスチナの種蒔きは日本のやり方と違います。日本は雑草を抜き、石を掘り出し、鋤で大地を耕して柔らかくし、良い土地を作ってから種を蒔きます。しかしパレスチナでは農夫は種をばらまきます。種は風に乗ってどこへ飛んでゆくのか分かりません。最初から無駄になることを覚悟で種を蒔くのです。ここでも４分の３（75%）が無駄になりました。**神様は恵みの無駄遣いをしてくださいます。愛は無駄を無駄だと思わないからです。**それに比べて、私たち人間は何と効率や計算で生きている事でしょう。人を信じられず、神を信じていないからではないのでしょうか。しかし神様は人を信じているのです。

●先日、心の病の勉強会で「ネガティブ・ケイパビリティー」について学びました。福岡県でメンタルクリニックをしている精神科医の帚木蓬生（ははきぎ　ほうせい）さんがこんなことを新聞に書いています。

「病気と長く付き合わなくてはいけない患者さんと向き合う時、『治そう』という考え方だけでは、どうにもなりません。私が逃げ出さずにやってこられたのは 40 年前に出会った『ネガティブ･ケイパビリティー（負の能力）』という言葉に支えられたからです。どうにも答えの出ない事態に直面した時に性急に解決を求めず、不確実さや不思議さの中で宙づり状態でいることに耐えられる能力、を意味する言葉です。…ネガティブ･ケイパビリティーによる処方を、私は『目薬、日薬、口薬』と言います。『あなたの苦しみは私が見ています』という目薬、『何とかしているうち、何とかなる』という日薬、『めげないで』と声をかけ続ける口薬。患者さんは難しい状態にあっても、何とかこれでやり過ごせます。…『早く何とかしてあげなくては』と焦ると、治らない時にはいらだってしまいます。人間の復元力は、早さとは異次元の所で発揮されますから、早さばかりが頭にあると、つまずきやすい。人は『自分の脳みそで考えて解決しないといけない』と凝り固まるところがありますが、それはせっかく晴れかけた空をかき乱すようなもので、成り行きに任せた方がよいこともあるのです。心配による心の痛みは、ワクチン注射ぐらいに思ってはどうでしょうか。思い通りにならない物事に対する免疫ができ、ちょっと強くなったなと。痛みを嫌なものとして払いのけようとすると、そのたびに痛みがこたえます。…痛みは『見せず、言わず、悟られず』淡々と日常のことをこなしていた方が楽になることもあります。」

イエス様は実に「ネガティブ･ケイパビリティー」が強かったお方でした。いつまでた

っても学ばず、悟らない弟子たちを愛し、それに耐えられました。人類の罪に何千年も耐え、人間となって生まれナザレに住んで30年、故郷の人たちの不信仰に耐え、十字架の上で、人間の無知に耐えられました。救いは、人間の悟る能力ではなく、一方的にご自身のものであることを分かってらっしゃったからです。キリストの忍耐力は驚くべきものです。

❹【私たちは神様の収穫物】

神はこの世に神の言葉という種を蒔き、実りを天の倉に集めようとされます。「**その方は、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。**」（マタイ 3：12）実った収穫物とは私たちです。私たちこそキリストの労働の業、大地の実りです。今日は、収穫感謝祭ですが、本当の収穫物とは私たちの事なのです。キリストは私たちの心を耕し、み言葉の種を蒔き続けます。実に、75％の神の言葉が無駄になるのですが、それでかまわずこの方は語り続けます。神の言葉と聖体だけがその人の中に神の国を作るからです。故に神の言葉を聞き続け、聖体も食べ続けなければなりません。

実にキリストはご自身のことを「一粒の種」と言われました。「**はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。**」（ヨハネ12：24）この種は十字架の上で死んで、墓に埋められましたが、３日目に芽を出しました。つまり復活したのです。この種は神の命を宿していたので決して死なず、墓を破って出て来たのです。私たちの中には、神が創造された「**復元力**」が備わっています。それは「神の像」であり、良い土地です。罪を犯しても決して破壊されません。そこにキリストという種が蒔かれると、何十倍、何百倍もの実りをもたらします。キリストの言葉を受け入れ、キリストの聖体を食べる人は、キリストという死なない種が蒔かれるのです。私たちはそのキリストという種の力を信じなければなりません。

●BC３世紀の弥生時代の遺跡から「**ハスの種**」が見つかり、それに光を当てて育てたら、芽が出たという話を聞いたことがあります。それと同じで、キリストという種は何年たっても生きています。あなたが死んでも、あなたの中で生きています。私は人間に期待しません。罪人の中にいるキリストの種に期待します。皆さんの中に埋められたキリスト、天の種、神の命、復活の種に期待します。時が来たら、その種は必ず芽を出します。その時、惨めな、弱い私たちは栄光あるキリストの似姿に変わるでしょう。その時、人は始めて気づくのです。ああ、キリストは本当に私の中にいたのだ、と。ああ、キリストはこんな私をよくぞ見捨てられなかった、よくぞこんな人間と関わり続けて下さったと。それこそ神の栄光なのです。どうか、キリストと言う種に期待し、希望をもって生きてゆきましょう。